

Title	「輸出向彫刻家具」について：ウラジオストク市での調査を中心に
Author(s)	門田, 園子
Citation	デザイン理論. 2013, 61, p. 91-104
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53586">https://doi.org/10.18910/53586</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「輸出向彫刻家具」について —— ウラジオストク市での調査を中心に ——

門 田 園 子

キーワード

輸出向彫刻家具, 東洋趣味, 折衷様式, ウラジオストク, 横浜洋家具  
Export Carved Wood Furniture, Oriental Taste, Eclectic Style,  
Vladivostok, Yokohama Western Furniture

はじめに

1. 輸出向彫刻家具と洋家具の相違, 輸出向彫刻家具の先行研究
2. 輸出向彫刻家具の製作
3. 輸出向彫刻家具の意匠: 極東ロシア, ウラジオストク市の輸出向彫刻家具所蔵調査をもとに
4. 結

はじめに

「輸出向彫刻家具」は、ケヤキ、ホオ、サクラ、カツラ、イチイなどの国産木材に、深彫りで花鳥や雲龍模様といった東洋の意匠を凝らした洋式の家具である。1890年代前後から1930年頃まで、横浜を中心に製作、輸出されていた。「横浜彫」, 「ヨコハマ・ファニチャー」, 「ハマモノ・ファニチャー」などと呼ばれていたが、横浜以外の地でも類似の家具が生産されていたため、本稿では以下「輸出向彫刻家具」と称する。

明治期以降日本は工芸品を海外向けに製作し、輸出するようになった。工芸品は維新後職を失った職人の救済、外貨獲得のための主要な輸出品であった。漆、七宝、木工、象嵌などの伝統工芸品のみならず、やがてはそうした技術を組み合わせて、海外の需要に直結した洋式家具が製作されるようになる。輸出向彫刻家具はいわゆる洋家具とは異なり、日本での需要はほとんどなかった。そのため、国内に残る輸出向彫刻家具は、一例を除いて確認できていない。一方、海外では英国、アメリカ、ロシア、オランダ、インドに輸出向彫刻家具が現存しており、オークションに出品されることもある。本稿では稿者が2010年の意匠学会大会シンポジウムで紹介した内容をふまえ、その後ウラジオストク市で行った調査をもとに、殖産興業下の日本において、独特のスタイルを築いてきた輸出向彫刻家具のデザインについて考察する<sup>1</sup>。

## 1. 輸出向彫刻家具と洋家具の相違, 輸出向彫刻家具の先行研究

洋家具が日本でつくられるようになったのは1850年代からで、はじめは外国から持ち込まれた家具の修理や複製が行われていたが、横浜元町を中心に洋家具の製造がさかんになっていく。輸出向彫刻家具の製作は洋家具に遅れて1880年代後半から始まった。輸出向彫刻家具は洋家具と明確に区別されており、1928年に神奈川県が発行した『吾等の神奈川県』の目次をみると、神奈川県の産業が順に紹介されているなか、工業の章に、「輸出彫刻家具」と「西洋家具」は別項目に区分されている<sup>2</sup>。また農商務省山林局編纂1912年刊行の『木材ノ工芸的利用』には、「洋風家具」は「指物用材」の項に、「彫刻家具」は「彫刻用材」の「建築建具及指物彫刻用材」の項に、仏具や芝山彫刻と並んで分類されている<sup>3</sup>。洋家具でも和洋折衷はみられるが、「だるま椅子」と呼ばれた木部を黒漆塗り金蒔絵したヴィクトリアン・ロココ様式の家具のように、日本の伝統技術と材料が用いられてはいるが、デザインと様式は西洋に倣っている。独自の意匠が凝らされた輸出向彫刻家具は洋家具とは異なるものとして、ここでは取り上げる。

輸出向彫刻家具の先行研究を以下に挙げる。輸出向彫刻家具にまつわる展覧会はこれまでに二度開催されている。最初は横浜市技能文化会館で開催された「横浜洋家具のあゆみ」展(1988年10月12日-23日)の「輸出された彫刻家具」の章で、写真資料や見本録を中心に紹介された<sup>4</sup>。二度目は1996年に横浜開港資料館で開催された展覧会「横浜家具を創った人びと」展で、当時資料館の研究員であった堀勇良氏によって企画された。堀氏は、横浜の輸出向彫刻家具製作の立役者四人を「四天王」と紹介している<sup>5</sup>。彼らや横浜以外の地でも1930年頃まで製作に携わっていた人々がいたことは後述する。最近の輸出向彫刻家具の研究では、山森由美子氏によるものが挙げられる。山森氏は輸出向彫刻家具を‘Meiji Baroque’にとらえ、『温知図録』(1875年)および1915年パナマ万国博覧会の資料をもとに、アメリカやオランダに渡った輸出向彫刻家具の調査を行っている。アメリカのインテリア雑誌に掲載された輸出向彫刻家具を調べた氏の研究は、輸出向彫刻家具を検証するうえで、示唆に富むものである<sup>6</sup>。

## 2. 輸出向彫刻家具の製作

本章では輸出向彫刻家具がどのようにして製作されていたかを横浜と、横浜に比べて僅かではあるが生産地であった東京、日光、大阪の場合について検証する。

横浜でいつ頃、誰が輸出向彫刻家具の製作を始めたかには諸説ある。『吾等の神奈川県』「輸出彫刻家具」の項には、明治二十二年(1889)頃、遠藤某が普通家具を製作するかたわらで、彫刻家具を手がけたのがはじまりで、以来「横浜フアニチュアー」の名称で輸出されるとあ

る<sup>7</sup>。しかし、堀氏の研究で遠藤某は1894年から95年に開業した沼島次郎兵衛のあとを1900年頃に継いだ遠藤安晴であることが明らかとなった<sup>8</sup>。また、1930年刊行の横浜商工会議所編『横浜に於ける中小工業 昭和5年末現在』には、明治二十年（1887）に篠原芳次郎が初めて横浜彫「フアーニチュア」を製作したとある<sup>9</sup>。このように輸出向彫刻家具事始めの記述には相違がみられるが、彫刻家具の輸出はおおむね1890年代には始まっていたとみなしてよい。東京の洋家具生産の中心地であった芝で刊行された『芝家具の百年史』には、明治中期には横浜の輸出向彫刻家具生産は衰退しはじめ、最後の担い手こそ遠藤安晴であったと書かれている<sup>10</sup>。これは誤りで、輸出向彫刻家具の製作は後述するように1930年頃まで続いていたが、少なくとも明治中期以前にすでに洋家具生産のなかの主要産業となっていたことが分かる。

横浜では1900年頃から1930年頃まで、常時6～7軒の輸出向彫刻家具製作工場があったが、輸出向彫刻家具を副業としていた従事者を加えると、さらに多かったとみられる。たとえば保科文次郎編『横浜商工案内』（横浜商工協会、1915年）の巻末広告に「美術彫刻師 大芝俊峰 建築用彫刻 神社仏閣請負並に尊像 彫刻西洋家具一式 丸彫置物 堆朱塗り及極彩色 木象眼 其他諸て木製品の依頼に応ず」とあるように、本来は神社仏閣の彫刻に携わっていた職人が、輸出向彫刻家具も担っていた例が挙げられる。また、加藤大三郎編『横浜姓名録』（横浜姓名録発行所、1898年）に輸出向彫刻家具製作者である高松政吉の名があったが、西洋家具商の項目ではなく、彫刻師の項目にその名が連ねられていた。こうした兼業を合わせての数字であろうか、1930年の『神奈川県工場要覧』には1928年時で、製造工場18、従業者200名以上、年産額50万円とある<sup>11</sup>。個別に見ると、沼島治郎兵衛は国産木材の扱いに慣れた、およそ30人の職工を抱えるほか請負もしていたが、初期の立役者の名前は1910年代にはすでにない。

輸出向彫刻家具は関東大震災が起るまでは、安定した需要と供給があった。震災により一度生産が途絶えかけるが、その後産業組合法による「横浜輸出彫刻家具信、購、販、利、組合」が1926年3月29日に設立され（組合員数6名）、製作が再開された<sup>12</sup>。組合本部は中区不老町2-138に置かれていた。これは輸出向彫刻家具を手がけていた品川商会と同地である。『横浜に於ける中小工業』に掲載された生産高は統計が始まった1922年で45万円、震災後から三年間は統計がなく、1929-30年に再び年産額17万円となり、1930年代以降は生産されなくなっている<sup>13</sup>。

組合が北海道木材商会から仕入れた材料は製作所で引き割り、工場では小割し、組み合わせた後で手彫りした。彫刻は荒彫したのち、削彫を施す。細かい彫刻には花鳥、龍、鳳凰などの意匠が好まれた。これをのみ目が消えるまで磨き上げ、横浜の間屋から購入した国内や中国産の漆やワニスを塗って仕上げていた。完成品は卸売商（売込商。1930年時は一人）により横浜や各地の輸出商に売り込まれ、輸出された。横浜で製作されていた彫刻家具はすべて輸出され、

横浜港から全体の五割、神戸港から三割、ほか二割が輸送された。行き先はアメリカ（輸出額の四割）、イギリス、南米（各二割）、ドイツ、インド、イタリア、スウェーデンその他（豪州を含む）の順に多い。三月から七月、九月から十一月が繁忙期であったという<sup>14</sup>。

海外に届いた輸出彫刻家具の評価はどうであったか。アメリカでの流通はめざましく、1925年の『大阪之工芸』では、サンフランシスコの日本美術雑貨について報告があるが、木製品中「横浜家具」は「宮島細工」と「箱根細工」に次いで輸入されているとある。続く文章では、好況時には巨額に達した輸入額も、粗製が目立ち、近年は需要が減少しているため、材料を精選して製作を入念にすれば持ち直すであろうと望みが託されている<sup>15</sup>。しかしながら、欧米を視察した日本人の論調は、「日本は従来彼等と共通の家具を持たぬにも関はず輸出工芸品として、西洋室に入れるべく又日本特有味を表はさんとして其創作に苦心された当時の日本営業者に対しては確かに畏敬し同情すべき点は充分あると思ひますが、私共彼地にあつてそれ等の品を見た感じを率直に申せば、其処に不調和である事と殊に其貧弱さに於て赤面した事が度々あります」<sup>16</sup>とあるように、厳しいものであった。ここで例示されているのは紫檀製の彫刻椅子であるが、日本からの輸出製品に対して戦後になっても繰り返して語られてきた、エキゾチシズムの誇張表現に対する懸念が現れている。

横浜の洋家具と競合する東京芝では、輸出彫刻家具は「一見甚だ怪奇なものでありましたが、これが不思議にも外人の好奇心を充たして一時は盛に欧米各地へ輸出され、あるいは観光客の家土産として買い帰るといふ有様」<sup>17</sup>と語られている。東洋趣味の過剰な彫刻は「怪奇」と表裏一体であり、粗製を免れなかったといえよう。一方で東洋趣味に目をつけて成功した者もいた。外国人を相手に骨董品や工芸品販売を扱っていた野村洋三（1870-1965）は‘King of Curious’の看板を掲げ、横浜本町一丁目の目抜き通りに赤塗りの閻魔像や大鷲、金鯨などの奇抜な装飾を施した「サムライ商会」（丹下武三郎が外観意匠製作）を立ち上げ、丹下や品川商会の輸出彫刻家具も扱っていた<sup>18</sup>。このような明白な東洋趣味に訴えかける商業主義は、高級洋家具を生産していた元町や、東京芝の嗜好とは相容れなかったが、宮彫りの伝統技術のながれを組む職人技は一方で高い評価も得、輸出彫刻家具は主要輸出産業のひとつとなった。

横浜ではほぼ独占的に製作されていた輸出彫刻家具であるが、例外もある。『木材ノ工芸的利用』によれば、1880年代に浅草に骨董店を開いた大野啓次郎が、外国人の好みに合わせて彫刻家具を考案し、自家工場に四人ぐらいおいて、一人は仕上げ物の手入れ、一人は外国人使用にするためのはからい、指物師四人、漆塗二人、芝山師四人、蒔絵師二人、金具師二人、ラック塗師一人、彫刻師四人の体制で、製作しているとある<sup>19</sup>。大野の家具は、漆塗りで象牙を象嵌するのが特徴であった。ただし、『横浜に於ける中小工業』（1930年）には、大野啓次

郎は横浜市南太田町で彫刻家具を営んでいるとあるので、後年輸出向彫刻家具製造のさかんな横浜に移った可能性がある。

日光でも横浜より安価な「日光彫」と称する家具が生産されていた。日光金谷ホテルの家具に名残があるとされているが、詳細は明らかではない。日光の地で製作されていたゆえ、「日光彫」という名がついたと思われるが、外国人の観光名所である日光はその名が一人歩きするほどブランド化されていたともいえる。雑誌『斯民』では、農家の副業として家具製作をすすめており、「所謂横浜彫及び日光彫」を紹介している<sup>20</sup>。ブルーノ・タウトのいう「中国風の豪華」を顕現する東照宮の意匠は、輸出向彫刻家具で好まれる題材であった。なかには日光建築そのものを模した書棚が七八百円で横浜商人によって販売されていたという<sup>21</sup>。1904年のセントルイス万国博覧会では、日本フェア会場入口は陽明門を模した楼門が建てられている。日光のブランディングは次に述べる山中商会製作家具にもみられた。

大阪では、国際的美術商であった山中商会が、1900年代から古美術品のみならず、伝統の技を用いた家具や工芸品を制作し、輸出に携わった。一例として、1904年のセントルイス万国博覧会に出品された「日光式」の家具がある。「日光式」については拙稿で扱ったので、詳細は省き、ここではその後明らかになった点を補足する<sup>22</sup>。

百人の職工が雇われていたという山中商会の家具工場は、大阪市北区北野芝田町に位置していた<sup>23</sup>。製作の指揮をとったのは1890年から石川県工業学校教諭、富山県工芸学校の教諭、校長を歴任した村上九郎作（1867-1919）である。北区にあった工場は1909年の火災で焼失したが、その後東区高麗橋一丁目に、1905年7月付けで「山中輸入合資会社」が設立された<sup>24</sup>。代表社員のひとり、松井貞治郎が、家具と工芸品製作に関与していた<sup>25</sup>。同名の会社はすぐに記録からなくなり、同地には合名会社山中商会の本社が残るが、1915年パナマ万国博覧会に出品した頃は、再び北区北野芝田町に新工芸品の工場を構えていた<sup>26</sup>。山中商会の家具で現存が確認できているものは、米国サリバン郡メリーワールドにある「松楓殿」所蔵の椅子ならびに卓子と、ロンドンのヴィクトリア&アルバート・ミュージアムに所蔵されている「法隆寺スタイル」の椅子である<sup>27</sup>。椅子張り、極彩色の仕上がり、多種の木材、多様な様式の引用などに、横浜の輸出向彫刻家具との相違がある。山中商会は芸術性を意識した高級家具を製作するため、海外に職工を派遣し、直販していたことも横浜との違いに関係しているといえよう。



【図1-a】

大阪では山中商会のほかに数名が輸出向彫刻家具製作に関わっていたが、その意匠は和洋折衷というよりは、中国の紫檀製家具に類似したものが多かった。

次に輸出向彫刻家具の博覧会への出品・賞牌について述べる。1904年のセントルイス万博では山中商会のほか、大阪の藤原伊兵衛および横浜の遠藤安晴が出品した<sup>28</sup>。

1910年ロンドンのシェパーズ・ブッシュで開かれた日英博覧会では、ロンドンのニュー・ボンド通り68番地に支店を構えていた合名会社山中商会（大阪）は「自営室内装飾」で金賞を受賞した。高松政吉（神奈川）の「木彫椅子，テーブル」，品川商会（神奈川）の「屏風，家具」は銀賞を受賞している<sup>29</sup>。仏壇を製作していた山中清七（大阪）は「仏壇「サロン」」で金賞を受賞，「サロン」はさながら輸出向彫刻家具を集めたかのような印象を受け，仏壇と輸出向彫刻家具の彫刻意匠や技術が共通していたことが伺える。高松政吉と品川商会の出品写真からは，後述するウラジオストック市に残る家具に似た輸出向彫刻家具が確認できる〔図1-a，b〕。日英博覧会に雇われて渡航した漆工，木版，七宝，刺繍の技芸家たちが，そのまま英国にとどまり，工芸品製作に携わっていたことはよく知られているが，家具屋ではじめは修理や漆の下塗り，次第に製作を行っていた日本人も，百人以上いたという<sup>30</sup>。彼らもまた販路を広げたといえよう。

1915年のパナマ万国博覧会では工業館に家具が展示された。この頃になると，輸出向彫刻家具は粗製濫造により評判を落とし始めていることが，出品協会の報告書から分かる<sup>31</sup>。家宅用具では，山中商会が山中工場松井貞治郎の名で，唐櫃，欄間，屏風5点を出品し，漆塗唐櫃が金牌，欄間，屏風は銀牌を受賞している<sup>32</sup>。これらが，いわゆる輸出向彫刻家具であったかは，確認できていない。神奈川県からは高松常作や篠原芳次郎ら輸出向彫刻家具ではおなじみの製作者らが出品している。

関東大震災後，輸出向彫刻家具の組合化が進んだこともあり，1926年フィラデルフィアで開催された米国独立百五十年記念万国博覧会では，横浜輸出雑貨同業組合が一丸となって，出品した。内訳は「横浜彫芝山入二枚折屏風 一本600圓 村田勝次郎」「横浜彫椅子，卓子，其他 五脚三卓 670圓 品川商店」「横浜彫彫刻面 三枚600圓 大野啓次郎」<sup>33</sup>で，組合長の品川商会篠原義雄は評議員を務めた<sup>34</sup>。同博覧会に山中商会ほか輸出向彫刻家具を取扱った他県の出品記録はない。



〔図1-b〕 図1-a，bとも『日英博覧会神奈川県出品協会事務報告』，1911-12年（買付なし）より

国内で開かれた内国勸業博覧会に、横浜の輸出向彫刻家具が出品されたことはなかった。彫刻家具は政府主導の推奨産業に選ばれなかったと考えられる。1903年大阪で開催された第五回内国博の「第三十三類 雑作品」に「卓子掛、窓懸、彫刻欄間、指物等」の出品があるが、すべて東洋の室内を想定したものである。「第五十八類 美術工芸 其一の三、木竹牙角介甲工」に岡治平（大阪）の「紫檀製輪花大卓（高2尺4寸5分）、象嵌入平台」、池田儀助（福井）の「紫檀中卓（高1尺2寸）」が出品されたが、いずれも中国製紫檀家具に範を取っていた<sup>35</sup>。



【図2】 沿海州美術館所蔵アームチェアと円卓（2010年8月13日沿海州美術館撮影）



【図3】 沿海州美術館所蔵長椅子（2010年8月13日沿海州美術館撮影）

### 3. 輸出向彫刻家具の意匠：極東ロシア、ウラジオストク市の輸出向彫刻家具所蔵調査をもとに

本章では、ウラジオストク市に現存する輸出向彫刻家具を紹介し、意匠および様式について分析する。2010年8月、現地での調査の結果、沿海州美術館に19点、アルセニエフ博物館に1点、ゴーリキ劇場に7点、ソログープ家に2点の輸出向彫刻家具が確認できた。

今回調査した家具は種類に限らずすべてカブリオール脚をもつ。植物文様（桜、竹、梅、菖蒲、菊、蓮、葡萄、蔦、唐草）、動物文様（龍、鳥、獣頭、蝙蝠）、自然文様（雲）、幾何学文様（菱文、家紋、雷文）などが巧みに施されているのも、全体の特徴といえよう。装飾過多な傾向やモチーフに吉祥文様を用い、カブリオール脚にする点は、明治期に職人の見本録として全国に配布された『温知図録』ですでに例示されている。以下、ウラジオストク市の輸出向彫刻家具を紹介し、意匠と様式について分析する。

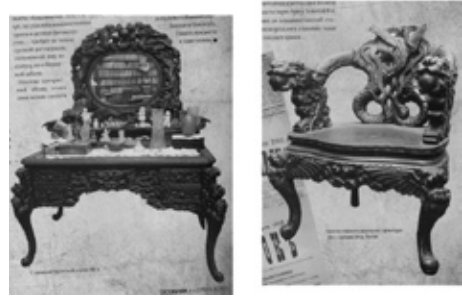
輸出向彫刻家具のなかでもひととき異彩を放っているのが、うねるような彫りの肘掛が特徴のアームチェアである [図2] [図5]。肘掛は龍の肢体で肘



【図4】 沿海州美術館所蔵ハイバック・チェアとサイドテーブル（2010年8月13日沿海州美術館撮影）



木との接合部に龍頭と玉が付いているものが多く、梅の幹と花の例もある。肘掛の流れるようなうねりを受けた背には、雲龍や花鳥の生き生きとした動きが彫られている。座には浅く三葉葵紋、座枠には雷文の連続文様が彫られている。座幕板は背に合わせた深彫りで、膝に羽根を広げた蝙蝠や獣頭があしらわれ、カブリオール脚の曲線へと帰結する。これらは山森氏の論文で紹介された横浜の鈴木留吉が製作したアームチェアと同じタイプで、背に龍、座面に三葉葵紋が彫られている点などが共通しているが、鈴木は龍眼は象嵌されているのに対し、すべて木材のみで加工されている<sup>36</sup>。日英博覧会の高松政吉と品川商会出品の肘掛椅子も同じ様式である〔図1-a〕。サムライ商会のはがきにも類似のアームチェアがある<sup>37</sup>。



〔図5〕 ソログープ家所蔵鏡台とアームチェア (ОСОБНЯК, No 4(45), 2010, p. 33, 37より)



〔図6〕 坂田武雄氏旧蔵家具 (2010年6月10日 稿者撮影)

長椅子の装飾はアームチェアと同様に、うねりのある肘掛、座面に三葉葵紋、背と座幕板に深彫りが施されている〔図3〕。表面積が広いいため、椅子の装飾と比べると、より大胆な表現がなされ、動物と植物が渾然一体となり、上下ないし左右のパネルで展開されているものなどがある。

ハイバックチェア〔図4〕には、対称的な背(〔図4〕左)と非対称的なもの(〔図4〕右)がある。座枠には雷文、座幕板に雲龍や菖蒲が施されている。背の裏面は凹凸がなく、雲形が浅く彫られ、表の賑々しさと比べて控えめである。菖蒲の透かし彫りの背はアール・ヌーヴォー様式にみられるような有機的な曲線を描いている。

円卓は幕板に菖蒲や雲が彫られ、脚に獣頭が施されているが、甲板は無装飾である〔図2〕。縁から幕板の装飾が、セットで販売されていた椅子やアームチェアの装飾に呼応している。同じタイプの円卓は日英博覧会に出品された〔図1-a〕。また横浜の家具製作風景を写した写真でも確認できる<sup>38</sup>。

サイドテーブルは〔図4〕のほか、大理石が嵌め込まれた甲板をもつ例が確認できた。台輪脚、幕板に輸出向彫刻家具共通の意匠が施されているが、同様の小円卓はクリスティーズ・ロンドンのオークションでは「大理石の甲板付き中国製の彫刻小円卓一対(20世紀)」(Sale5997/Lot165, 07/12/2010)として出品されており、中国製の可能性は否めない。ただ

し、沿海州美術館の登録記録には日本製と記されている。また山中商会も類似のサイドテーブルを製作している。

鏡台（〔図5〕左）は横浜創業の種苗会社である「サカタのタネ」創業者坂田武雄氏が所蔵していた鏡台と類似している〔図6〕。坂田氏の鏡台は洋服筆筒、キャビネットとセットで、1926年から1930年頃の製作とされる（横浜市工業技術支援センター保管）。おそらくは坂田氏夫人の婚礼家具であったといわれており、カブリオール脚に葡萄の実と蔦、枝が彫られている。木肌はウラジオストク市の例に比べると明るく、やや平坦な彫りである。

今回実見したなかで最も大きくかつ最も保存状態のよかった家具が〔図7〕である。外観のみならず、キャビネット内の彫刻も鮮やかな動植物が混在する作品であり、唐破風のペディメントが特徴的である。キャビネットのペディメントにはほかにも雲龍、富士山の例があるが、いずれも天空へ向かって飛翔するイメージの彫刻が頭頂飾りとなり、裾野に向かって飾り柱から龍や植物の蔦草木が絡まり降り、花開くダイナミックな展開をしている。引き出し前板には正面を向いた龍が施されている。こうした装飾を省くと、バロックからロココ、18世紀クイーン・アン様式あるいは新古典様式のキャビネットに近いスタイルである。ウラジオストク市では確認できなかったが、ライティング・デスクも数例みつかっており、頭頂に富士山や雲龍などの、いずれも天空のイメージが彫刻されている〔図1-b〕<sup>39</sup>。

使用木材は沿海州美術館所蔵の家具はすべてイチイである。イチイはアイヌの木彫りにも使われ、深彫りに適している。沿海州美術館の記録には黒漆塗りの日本製と明記してあったが、多くはワニス塗で、表面が剥落しているものもあった。ゴーリキ劇場館長室の家具は、現在も使用中であるが、他所にあった家具に比べて表面がツヤのある黒で、塗り直しの跡がみられた。

沿海州美術館に保管されている6枚にわたる輸出向彫刻家具の登録記録には1966年9月3日から12月までの日付で、初代館長イルチュン・ニーナ・アンドレーヴナ〔Ilchun Nina Andreevna〕のサインがある。登録記録は「椅子一脚」というように簡略的であったため、所蔵作品とすべては照合できなかった。また稿者が実見した点数を超える31点が記録されているが、これは日本製と同定できなかった例を省いたためである。そのなかには彫刻なしの、象嵌細工が施された家具があった。これは、2011年に開催された「華麗なる日本の輸出工芸」展に出品された、象嵌細工と組み合わせたキャビネット、



〔図7〕沿海州美術館所蔵キャビネット  
（2010年8月17日稿者撮影）

衝立に類例がある<sup>40</sup>。31点の内訳は旧ソ連時代に船員クラブから移管され、沿海州商人博物館から船員文化宮殿の指揮のもと寄贈された14点、第一次世界大戦終了後の沿海州解放を記念して、第一回環太平洋ソ連共産党労働者同盟会議（1929年）時に水上輸送労働者同盟地方委員会に贈られた10点（内1点は役所〔詳細は不明〕、5点は船員文化宮殿、4点は沿海州共産党委員会旧蔵）、ウラジオストク市共産党委員会から贈られた7点である。

1844年設立のアルセニエフ博物館にある方形卓子は、1894年から1930年にかけてウラジオストク市に暮らしていたアメリカ人女性エレノア・プレイ旧蔵である。プレイの遺した日記と写真から日本人の召使いを雇っていたことが分かっており、彼女ら家族は日本事情に通じていた<sup>41</sup>。日本とウラジオストク市の交流は活発で、1880年代から1922年のシベリア撤兵までは、日露戦争で日本人全員が一旦帰国するも、ウラジオストク市には現在も市の繁華街にあたる、アレウツスカヤ通り、キタイスカヤ通りを中心に多くの日本人が暮らしていた。彼らはサービス業のほか、一般雑貨を取扱う小売個人商店を営んでいる場合が多かったという。彼らを通じて輸出向彫刻家具が日本の開港都市から渡ってきたことも考えられる<sup>42</sup>。

1883年に初めて地方紙「ウラジオストク」を創刊したニコライ・ソログープ（1893年歿）の暮らしていたアパートに残る二点の家具〔図5〕は、ドイツ商社のクンスト・イ・アルベルス商会から購入されたという<sup>43</sup>。同商会は、今もウラジオストク市の中心地にある Gum [=百貨店] の入る建物（1885年築。スヴェトランスカヤ通り31-33番地）に本社があった。1864年頃からおもにドイツ、スウェーデンの外国人商人が活動するようになり、クンスト・イ・アルベルスもそのひとつであった<sup>44</sup>。戦前は日本や中国にも支社があった同社で、輸出向彫刻家具を取扱っていたとするのは妥当であろう。ウラジオストク市を拠点とし、函館で缶詰生産などを営んでいたデンビー商会内でも輸出向彫刻家具が使用された写真があり<sup>45</sup>、また横浜の居留外国人も同様の家具を使っていた形跡がある<sup>46</sup>。旧ソ連時代までの活発な交易をとおして、これらの開港都市からウラジオストク市などの極東、アジア地域へと家具が流出あるいは販売されていった足跡を辿れる。

これまで見てきた輸出向彫刻家具が他国でも生産されていたかどうかについては、使用されている意匠が中国的であるという指摘もあり、生産が皆無であったかどうか断定はできない。明治前半期、職工の手本とされた『温知図録』と起立工商会社の図案集は、日本風や固有の意匠が求められたが、その実中国絵画を応用しているという指摘もある<sup>47</sup>。ゴーリキ劇場の家具は1940年代に満州から渡ってきた由来があり、表面の光沢や唐草や格子柄などの意匠の



【図8】 Sale5909/Lot84 <<http://www.christies.com/>> Past Lots Search より

選択からも、中国で模倣品が製作されていた可能性は否めない。ロンドンのオークション会社クリスティーズに出品された輸出向彫刻家具「1900年頃製作アングロ・インディアン彫刻椅子」(Sale5909/Lot84, 2009年7月29日) [図8] のように、他国製の可能性を示唆するものもある。見れば、花鳥木が彫られたカブリオール脚など日本で生産されていた輸出向彫刻家具と共通しているものの、流れるような彫り、表面仕上げに違いがみられる。



【図9】 サーラル・ジャング博物館所蔵彫刻家具（2011年秋 Gregory Irvine 氏撮影）

また、インドのハイデラバードにあるサーラル・ジャング博物館所蔵の輸出向彫刻家具は、さらに躍動的かつ空想に富んだデザインで、横浜の家具に範を取っているものの、明らかな相違は無視できない [図9]。需要に合わせて意匠を変えていたのか、あるいは日本の輸出向彫刻家具の見よう見まねで大陸でも生産されていたのか。中国を超え、大英帝国下のインドでの意匠の変容については、今後調査を進めていく次第である。

#### 4. 結

輸出向彫刻家具に使われた意匠は東洋趣味を喚起する外国人の嗜好に合わせたものであったが、一方で、同様のモチーフは明治宮殿などでも使用されているように、日本という国を表象する本邦固有の意匠図案として、多用されたといえる。日本の神社仏閣から本邦固有の意匠を採択するきままった形が輸出向彫刻家具に現れたといえよう。しかし、用途に合わせるため、構造の部分はロココ、ルネサンス様式などの洋家具に倣い、洋風を模倣するより馴致したため、形態と装飾の噛み合わない、奇妙なまでの折衷様式がうまれたといえる。その結果「濱行と称する繁褥華麗なる嗜好」<sup>48</sup>と揶揄されつつも、外国の需要に応えるデザインが誕生した。

輸出向彫刻家具が1930年代初頭には生産されなくなった直接的要因は世界恐慌であるが、輸出向彫刻家具が流行遅れとなったことも原因と考えられる。バロック的であり、装飾過多な輸出向彫刻家具は、東と西の出会いの衝撃という時代背景に合致した特殊な表象であったため、そのショックが緩和され、次第に目の肥えてきた外国人には飽きられていく運命にあった。

しかし、こうした折衷デザインが東西の出入り口横浜で出現したということは、日本の近代化を考える上で興味深い。背景には横浜が内に向けては洋を、外にむけては和を知らしめ、両洋にとってのエキゾチシズムを育む土壌にあったということが考えられる。

洋家具に東洋的な意匠を施す試みは、18世紀のチッペンデルやヴァイスヴァイラーの家

具にまでさかのぼり、19世紀のアングロ＝ジャパニーズ様式の家具や、本稿で取り上げた輸出向彫刻家具に至るまで、室内装飾の歴史の一角を担ってきた。輸出向彫刻家具の終焉と前後する、1925年の通称アールデコ博覧会においては、「清楚で余計な飾がない」、日本的要素を加味した家具が欧米の作家によって出品されている<sup>49</sup>。両洋が重なり、ときに反発しあって新たなデザインがうまれていく過程から、時代のありよう、人々の眼差しの変化がみてとれる。輸出向彫刻家具の大陸への広がり、輸出向彫刻家具以前以後の家具を中心とした室内装飾の東洋趣味については、稿をあらためたい。

## 謝 辞

本稿の作成に際し、沿海州美術館館長 Irina Azhimova 氏、田中盛男氏、住友商事ウラジオストク支店、Elena Kazarnovskaya 氏、横浜工業支援センター 榎本まさひこ氏、ヴィクトリア&アルバート・ミュージアム Gregory Irvine 氏、町田市立国際版画美術館 滝沢恭司氏、森純子氏、Stuart Tulloch 氏にご教示賜りましたことを深謝致します。

## 註

- 1 稿者は、中村圭介『文明開化と明治の住まい——暮らしとインテリアの近代史 上』（理工学社、2000年）掲載の泉修二氏の談話（97頁）から、ウラジオストク市に輸出向彫刻家具があることを知った。
- 2 神奈川県『吾等の神奈川県』神奈川県、1928年、5頁。
- 3 農商務省山林局『木材ノ工芸的利用』大日本山林会、325-340頁および530-536頁。
- 4 横浜市勤労福祉財団編『横浜洋家具のあゆみ：西洋をつくった街・元町 特別展』横浜市勤労福祉財団、1988年、19-21頁。
- 5 横浜開港資料館「横浜家具を創った人びと：もうひとつの横浜家具 彫刻家具の四天王」『開港のひろば』Number 51、1996年1月参照。
- 6 Yumiko Yamamori, “Export Carved Furniture: From Official Pieces to the ‘Meiji Baroque’”, *Orientalisms*, Volume 37, Number 4, May 2006, pp. 41-46. Yumiko Yamamori, “Japanese Arts in America, 1895-1920, and the A. A. Vantine and Yamanaka Companies”, *Studies in the Decorative Arts*, Bard Graduate Center, Spring-Summer 2008, pp. 96-126.
- 7 神奈川県, op. cit., 383頁。
- 8 横浜開港資料館, op. cit., Number 51, 2頁。
- 9 横浜商工会議所『横浜に於ける中小工業：昭和5年末現在』横浜商工会議所、1930年、355頁。
- 10 俵元昭編『芝家具の百年史』東京都芝家具商工業協同組合、1966年、79頁。
- 11 神奈川県工場協会編『神奈川県工場要覧』神奈川県工場協会、3-5頁。

- 12 横浜商工会議所, op. cit., 360頁。
- 13 Ibid., 355-356頁。
- 14 横浜商工会議所, op.cit., 355-361頁。
- 15 在桑港小山徳満氏報告「桑港に於ける日本美術雑貨に就いて」『大阪之工芸』 1 (3) [35], 1925年, 20頁。
- 16 神奈川県工芸協会囑託 佐藤武造「欧州に於ける東洋趣味に就て」『大阪之工芸』 Vol. 4, 33号, 1928年3月, 7頁。
- 17 俵元昭編, op. cit., 79頁。
- 18 「獨立自覺の一勇將サムライ商會主人」『商工世界太平洋』 7, 19 (臨時増刊27), 1908-9, 85-87頁。  
「空拳一揮サムライ商會を成せる野村洋三氏」『実業少年』 3 (3), 1909, [5] 頁。
- 19 農商務省山林局, op. cit., 534頁。
- 20 鶴見左吉雄「農商務書記官商品陳列館長」『輸出品としての木材工芸品』『斯民』 第九編第六号, 1915年, 58頁。
- 21 農商務省山林局, op. cit., 536頁。
- 22 拙稿「山中商会, 『日光展示室』 — 明治期洋式家具と室内装飾のスタイルに関する一考察」『デザイン理論』 44, 2005年, 89-104頁。
- 23 大阪商業會議所『大阪商工名録 大正七年改訂』大阪商業會議所, 1918年, 89頁。
- 24 山本真紗子「美術商山中商会 — 海外進出以前の活動をめぐって」『Core Ethics』 Vol. 4, 2008年, 373頁。
- 25 山中商会の一族であった松井貞治郎については、「高峰譲吉邸と京都高等工芸学校」展（京都工芸繊維大学美術工芸資料館 2012年1月23日 - 3月3日開催）で、高峰邸の室内装飾を監督したと紹介されている。山中商会は家具のほかにも輸出工芸品を製作、社長の山中定次郎は商工省囑託として、輸出向け工芸品の製作について意見していた。第五回大阪府工芸展覧会には第四部（参考出品）に「欧米輸出向工芸品各種」を9点出品、協賛賞を受賞している（『大阪之工芸』 Vol. 5 47号, 1929年5月, 17頁および20頁）。
- 26 桑港万国博覧会大阪出品協会『桑港万国博覧会大阪出品協会報告』桑港万国博覧会大阪出品協会, 1916年, 72頁。
- 27 松楓殿の椅子と卓子は、ロンドンのヴィクトリア&アルバート・ミュージアム所蔵の椅子 [Museum number: FE.548-1992] 同様山中商会のカタログ (Yamanaka & Co., *Catalogue of Room Decorations and Artistic Furniture*, Osaka, 1905.) に掲載がある。
- 28 *The Exhibition of the Empire of Japan: Official Catalogue*, International Exposition, St. Louis, 1904, p. 163.
- 29 農商務省日英博覧会事務局『日英博覧会授賞人名録』農商務省日英博覧会事務局, 1910年, 103-105頁。
- 30 佐藤武造「欧州に於ける東洋趣味に就て」『大阪之工芸』 Vol. 4 33号, 1928年3月, 9頁。

- 31 桑港万国博覧会大阪出品協会, op. cit., 42頁。
- 32 Ibid., 71頁。
- 33 神奈川県商工協会『米国独立百五十年記念万国博覧会神奈川県出品協賛会事務報告』神奈川県内務部, 1926年, 25-6頁。
- 34 横浜実業組合連合会『大礼記念社団法人横浜実業組合連合会銘鑑』横浜実業組合連合会, 1928年, 202頁。
- 35 『第五回内国勸業博覧会出品目録 第十部』内国勸業博覧会事務局, 1903年, 頁付なし。
- 36 Yamamori, op.cit., 2006, p. 44.
- 37 横浜開港資料館, op. cit., Number 51, 1 頁。
- 38 横浜市勤労福祉財団編, op. cit., 21頁掲載 'Catalogue of Japanese Carved Wood Furniture' (1916-21) より。
- 39 ライティング・デスクは『横浜洋家具のあゆみ』展に出品された1920年代の商品見本帳 (19頁), 『木材ノ工芸的利用』「第十八回版輸出向彫刻卓子及椅子」, [図1-b] (中村正治編『日英博覧会神奈川県出品協会事務報告』東京印刷株式会社横浜分室, 1911-12年), クリスティーズ・ロンドン出品「東南アジア彫刻デスク (Sale5732, Lot207, 2010年6月8日出品) の例がある。
- 40 たばこと塩の博物館編『華麗なる日本の輸出工芸 — 世界を驚かせた精美の技: 金子コレクション』たばこと塩の博物館, 2011年, 10-14頁。
- 41 米国議会図書館ウェブサイト 'Eleanor Pray Album' (Access Date: 10/06/2012) <http://lcweb2.loc.gov/phpdata/pageturner.php?agg=ppmsca&item=02802>
- 42 佐藤洋一『帝政期のウラジオストク: 市街地形成の歴史的研究』(『早稲田大学学術叢書』10) 早稲田大学出版部, 2011年参照。
- 43 *ОСОБНЯК*, 4 (45), 2010, pp. 30-37.
- 44 Ibid., p. 33.
- 45 清水恵「函館におけるロシア人商会の活動: セミョーフ商会・デンビー商会の場合」『地域史研究はこだて』第21号, 1995年3月参照。
- 46 横浜市勤労福祉財団編, op. cit., 21頁。
- 47 樋田豊次郎編『明治・大正期における図案集の研究: 世紀末デザインの移植とその意味』(科学研究費補助金基礎研究 (B) (1) 研究成果報告) 東京国立近代美術館, 2002年参照。
- 48 「本邦の美術工芸品に就きて」『図按』第三卷廿九号目, 1903年, 23頁。
- 49 田邊孝次「現代仏蘭西家具の総合陳列: 仏蘭西美術展覧会」『帝國工芸』2 (13), 1928年5月, 217-218頁。